

「お母さん」って誰のこと？

小竹久美子

まつしま産婦人科小児科病院・助産婦

「お母さんになるんだからしっかりしなくては」「さすがお母さん！」

助産婦なら、このセリフを何度となく口にしてきているだろう。

私も、女が妊娠すると「母性」という特別な感情や能力が芽生えるかのように思い込み、「母性の確立」を助けるのが助産婦の使命と思って働いてきた。でも……ちょっと待って！「母性」って何だろう。

子どものいる人だけが持っているものなのか、私たちが手助けをしてできていくものなのか、と考えるチャンスももらった。

院内での母親学級の見直しが始まったとき、どうせならオリジナルのテキストを作ってしまうということになった。自分たちのやってきたことを振り返り、考えていることや伝えたいことを文字にしていくという作業の中で、ひとつひとつの「ことば」の持つ意味をあまり考えないで使っていた自分たちの姿が見えてきた。

「母親学級」という呼び名もそのひとつだった。私たちは、出産する女性本人が妊娠・出産・子育てをその人らしくできるように手伝いたいのだ。「母親」という特別な種類の人にならなくていいのを助けたかったのでも、母性の確立を援助したかったのでもない。

それなら、まず“母親”学級という言い方からやめようということになり、「出産準備クラス」という呼び名に今は落ちついていく。

ちょうどその頃、「夫立ち会い出産」をテーマにシンポジウムに参加することになった。夫が出産に立ち会うということに医療サイドは、妻をリードでき、家事・育児への参加が高まり、父親とし

ての役割を自覚できるようになるなどの大きな期待をかけていることがわかった。立ち会い出産をしたか・しなかったかで父親としての自覚が左右されるかのような考え方に「何か違う」という思いを持った。

このような現実をみると、私たちは医療の専門職という名のもとに、女は母親らしく・男は父親らしく……などの枠の中に、深く考えもしないで多くの人たちを押し込めてきたのではないかと、いう思いが強くなった。

たとえば、我が子でもかわいいと思えないときだってある。うっとうしくなることだってある。あつて当たり前。そもそも「母性」や「父性」なんて、それを便利に使いたい人たちによって作られた概念である。むしろ、かわいいと思えないことで「母親失格」と自信をなくしたり、自分を責めてしまう人に対して、私たちが「人間として当たりの感情」と受け入れる立場に立つことだと気づかされた。

「お母さん」「母性」「母体」を院内でのパンフレットやテキストから取り去った。もちろん口にもすることも止めた。「〇〇さん」「あなた」「あなたの体」と言い替えることで、かえって私たちが向き合う相手がはっきりと見えてきた。

「お母さん」「母親」などという言い方は、世間が作り上げた価値観や実態のない存在に対する語りかけであって、きちんと一人の人間と向き合っていなかったのだ。

さらに「患者」を「利用者」に、「病室」を「入院室」に言い替えてみたことで、出産は病気ではなく、医療の管理下に置かなくてもよいと思えてきた。習慣的に使ってきた「ことば」と向かい合うことで、その奥にあった本質がいっぱい見えてきた。